

## 優秀賞

# 不可能を可能に

阪南市立鳥取東中学校 三年 射手矢 いってや 花音 かのん

私はどこにでもいる普通の中学生だ。強いて言うならピアノが人よりも弾けるのが自慢できるくらいだ。勉強、運動、容姿、家庭環境もいたって普通で、そんな平凡さに物足り無さを感じ、時に人を羨んだりしてしまう。しかし、そんな「普通」の生活をつまらないと考え、努力もせずただ毎日を過ごしている自分が恥ずかしいと感じさせられる出会いがあった。

それは昨年、私の中学校に義足の陸上選手である山本篤さんが訪ねてこられたことがきっかけだった。笑顔が印象的なスポーツマンの山本さんは、私とは違って足が片方なく義足を身に付けていた。私はその姿を初めて見たとき、見てはいけないものを目にした気持ちになり、なかなか直視できなかつたのを覚えている。そこには、どこかで気の毒に思う気持ちがあったのだと思う。そんな私とは裏腹に、山本さんはとても堂々として生き生きと生きている。今では、義足も体の一部として当たり前存在になっているのだろう。

大部分の人は、自分の足で歩くのが当たり前で、普通のことだととらえられている。しかし、実際には何かに不自由を抱えているにもかかわらず、残された機能と向き合いながら生きている人が多く存在している。そして、片足しかなく私が不自由で気の毒だと決めつけていた人が、二本の足がある私よりも、ものすごいスピードで走っている。力強く生きていく山本さんを間近で見た時、自分が何の努力もせずただ普通に生きていることがむしろ恥ずかしく思った。片足で不自由だと決めつけていたのは私で、山本さんはむしろこのおかげで得たものがあると、とても生き生きとしたオーラを放っていたことに驚いた。その輝く姿を見た時に、私は

気の毒だという感情を少しでも抱いていた自分が間違이었다と感じた。

世の中には様々な障害を抱えている方がいる。例えば盲目のピアニストの辻井伸行さんも見えない目の代わりに素晴らしい感性で美しいピアノを奏でる。私の住む市にも身体が不自由で手が使えないが口に筆をくわえて、とても美しい絵を描く口筆画家の石橋さんもいる。不自由さを何かでカバーし、残された機能を使って努力し一生懸命生きている方がたくさんいるのだ。勿論、山本さんも足を失ったことで大きな苦しみを背負い、絶望した時期もあったに違いない。運動が大好きでスポーツ万能な方だったのに事故で足を失ったと話されていた。けれど、そこから立ち直り夢や目標を諦めずに一生懸命生きている。ここまでくるのにはどれほどの時間がかかったのか、私には想像もつかない。昨日まで歩けた足がいきなりなくなるというのは、耐えがたいほど辛い経験に決まっている。きっと、失った人にしか分からない気持ちがあるはずだ。けれど義足という素晴らしいパートナーに出会い、自分の新たな人生を切り開いて、いろいろな困難を乗り越えてきた山本さんとしても格好よく見えた。そして更に、その出会いからしばらくたってパラリンピックの走り幅跳びで銀メダル、400メートルリレーのアンカーとして出場し、銅メダルを獲得されていたことを知った。私の学校に来てくれた、あの山本さんが世界の舞台でメダルを獲得されたのだ。私はそのニュースを見た時、とても嬉しくて大きな拍手を送った。

山本さんとの出会いがきっかけで、私は自分にできることをもっと努力して頑張らなければいけないことに気づかされた。きっと私にしかできないこともたくさんあるはずだ。ただ歩いているだけでは見つからないだろう。辛いことや涙を流す経験があっても、夢や目標を諦めなければ、前に進めていける。私も自分の未来のために意味のある一步を踏み出そうと思う。